

## 児童サービスにおける子どもへの適書の紹介に関する検討 —図書館員の要因と事例の分析—

加藤 有紗

公共図書館の児童サービスの目的の一つは、子どもが自分に適した本を選択できるように支援することである。これは、適書を子どもに手渡していくことで実現できると期待されており、その手段の一つが「インフォーマルなブックトーク」であると考えられる。これは、一人あるいは数人の子どもを相手に、そのときの状況に応じて、図書館員が即座に1, 2冊の本を紹介したり、ある本の内容をかいつまんで話したりすることとされる。適書という観点では個人に対して行うことが有効であると考えられ、それを実践していくことが重要だと言える。しかし、図書館員を対象として、個々の子どもへの適書の紹介に関連する、図書館員の要因や、適書を紹介する方法等を検討した、実証的な研究はなされていない。

そこで、本研究では、第1に、個々の子どもへの適書の紹介に関連する、図書館員の要因（認知・知識・コミュニケーション等）を明らかにすること、第2に、個々の子どもに適書を紹介する効果的な（本への興味を高めるような）方法を検討することを目的とした。

予備調査では、『年報こどもの図書館 2012年版』の「全国子ども図書館一覧」に掲載された子ども図書館と、2016年に文部科学省により「子ども読書活動優秀実践館」として表彰を受けた関東圏の公共図書館の中から、運営主体が市区町村である等の基準を満たす館を、ウェブページ調査と電話調査によって選出した。

本調査では、予備調査で選出された館に郵送による質問紙調査を依頼し、子ども図書館15館の66名（回収率85%）と公共図書館8館の28名（回収率97%）から回答を得られた。質問紙では、個々の子どもへの本の紹介の経験の有無・頻度、個々の子どもについての知識、子どもとの日頃のコミュニケーションの頻度、本の紹介の事例等を尋ねた。

個々の子どもへの本の紹介の頻度、個々の子どもについての知識、子どもとの日頃のコミュニケーションの頻度等の相関関係についての検討等を行った。本の紹介の事例では「子どもの、本への興味を高められた要因」等に着目して適書の紹介の方法を検討した。

分析の結果、主に以下の2点が示された。第1に、目的1に対して、「子どもとの日頃の積極的なコミュニケーション」は、個々の子どもへの適書の紹介において、紹介の頻度と関連する要因になることが示唆された。また、子ども図書館のみで、個々の子どもについての知識を得る手段として関連する要因になることが示唆された。その他に「図書館の蔵書についての知識の多さ」は、子ども図書館のみで紹介の頻度と関連する要因になること、「個々の子どもについての知識」は、公共図書館のみで適書の選択に関連する要因になることが示唆された。第2に、目的2に対して、個々の子どもの興味を一番に考慮して本を選択する事例が最も多かった。また、個々の子どもへの本の紹介の際には、本を読み始めやすくするような工夫や、紹介する本以外の本への興味も高める工夫が見られた。

（指導教員 鈴木佳苗）